



日影眩、二年振り三度目の個展である。今回日影はギャラリー内に 13 点、事務所に 8 点の小品を展示した。パンフレットのテキストは谷川渥、吉岡のブログの評、日影自らのステートメントと、考えるヒントが満載である。

今回の展覧会で、重要な事項は二つある。ひとつは日影が 1980 年代に発表した作品を再制作したことにある。漫画とも、イラストとも、ニューペインティングとも言えない作品を振り返ることによって、日影は原点に帰った。

もう一つは、日影が NYC から日本に帰国し、日本の風景を描くことになった点である。方法としては前回同様、描かれる対象と背景が侵食/溶解していく姿である。その度合が、これまで以上に激しくなっている。

谷川は論の中で見上げる構図をヨーロッパの伝統的な天井画「ソッティンスー」と比較しながら、日影はそういっただまし絵やイリュージョンではなく「人間を地面近くから見上げて現出する都市空間を問題にする」と語る。

侵食/溶解については以下である。「曲線状にくっきりと切り取られた輪郭線を持つ人間の身体は、地に侵されてそのなかに沈みこむようでもあり、あるいは逆にそのなかから図として浮かび上がるかのようでもある。」

吉岡は日影の対象について考察している。NYC の人間がつまらなく、東京の人間が面白い。侵食/溶解については「ただ単純に消えて無になりかかっているところであると解釈」する。

ローアングルは「ありえない視点」であり「虚無の方向性をもっている」。総じて「消えかかって、虚無に帰ろうとする人間を描くことで、逆にこの世界の实在性を示しているかのようである」とする。

日影のステートメントである。「私たちは自分が生きた時代の私たち自身の似姿を必要としているかも知れない。埴輪や土偶がその時代を表すように。(中略・引用者)ただ人の手のみが、その回復を可能にすると私は信じている。」日影は FB の何方かの書き込みの「片手にスマートフォンを持つ」という指摘に「正鵠を射る」と応えていた。このような三者の見解と、私が考えていたことには大分の開きがある。

まずは日影の視点だが、今回の作品群を見て、私は日影とは NYC も東京も同じ見方をしている、日影はもしかしたらどの時代の誰や何を見ても、日影独自の見解を示すのではないかと感じた。だからスマートフォンは気にならない。それは日影の作品が、如実に語っている。最新作も過去の作品の再制作も、上記に掲載している図版が示す通り、良い意味で違いがないのである。人間を見ている。その視線の方法が異なるだけである。

日影の作品で重要視すべきは、どのように人間が描かれているかにある。それはこれから日影の作品が地に支配されるかよりも、人間そのものが消えてしまったらということにも注目できるのである。人間が消えると世界は消滅する。

